愛夢＝アム＝

ミヤーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛夢＝アム＝

【Ｎコード】
Ｎ６６２６Ｙ

【作者名】
ミヤーン

【あらすじ】
わたしは常々一人称の小説の限界を感じていた。
〈一人称の小説の主人公はどうして作家のように語りが上手いのだろうか？〉　（エピローグ／文中より）　◆◆◆◆◆
「おはよう。あむ」
と、きみの声が聴こえた時から物語は始まる。
目が覚めたら記憶がなかった。
瞼を閉じ『昨日の自分』を探す。

『昨日の自分』を探すつもりが『前世の記憶』が脳裏にうかんだ。
名前は安室（あむろ）　覇那子（はなこ）。
ニックネームは『アム』。
アムの村には伝説がある。
色情魔なるものがいる。
色情魔に憑かれた男性は霊域に住みつく。
霊域に寄りつく女性を襲う。
霊域には近寄らないよう、幼い頃から教育されていた。
でも、行かずにはいられない。
アムの愛した彼が、アムを愛した彼が、色情魔に憑かれた、と噂になっているのだから……。

前編／きみの記憶

《きみの記憶》

作者　丘　七草
Ｎａｎａｋｕｓａ　Ｏｋａ

前編／過去の観覧
〈プロローグ〉

「おはよう。〇〇さん（又はくん、又はちゃん、又は様、又は敬称略）」

そんな書き出しの物語があったとするね。
読者はどう想うかな？

そんなのにお目にかかれば、、、
〇〇さんには『昨日』はないのかな？
それとも、
のちのち『昨日』を描くのかな？
それとも、
目覚める直前の夢のお話しするのかな？
それとも、
たんに駄作なのかな？
何か思惑があるのかもだけどね、、、
それにしても芸がないよね。まったく。
そんな読者の気持ちわかるんだけどね…。

それでも、

「おはよう。あむ」
と、きみの声が聴こえた時から物語は始まる。

しかたがない。
なんせ、目が覚めたら記憶がなかった。
ここがどこなのかもわからない。

わかるのは、、、
?今までベッドの上で眠っていたこと。
?性別、女性。
（年齢、不詳。だけど自分の手の甲を見るかぎり年老いてはいない）

ベッドの上で膝をかかえあたりをみわたす。
病院の個室のようだった…。

自分がどこの誰かわからない。
一生懸命『昨日』を探す。
それでも『昨日』は探せなかった。

「あむ。気分はどう」
と、きみの声がもう一度聴こえた。

いいはず、ない。
記憶が、ない。
シャレになんない。笑えない。
だから返事をしたくない。

無意識に、ほっぺをチュ〜っと吸い込んだ、ひよこのくちばしのようなカッコウをしていた。

「どうしたの、あむ、ボーっとして？」
と、きみは人の気を知らず続けた。

ボーっとしているつもりは、ない。
…。
…。
…。
思考中。
あむ＝（イコール）名前。
『愛夢・愛舞・亜夢・亜舞・編む』
四通りのかわい文字プラスワンが頭ん中にうかんだ。
まっ先にうかんだ『愛夢』にきめた。
何もかもが消えて、ない。
あなたならどうするぅ？

愛夢は何事もないかのように、きみにいった。「もう少し、ねる」

アムの記憶

〈第1話　アムの記憶〉

彼女は追いかけられていた。
片側は絶壁。もう片側が谷底。
そんな山道だった。
前方に洞窟がみえた。
彼女はその洞窟の手前で、男に捕まってしまった。
男の顔は骨と皮。
目が落ちこみ、頬が落ちこみ、もはや人間のそれではなかった。

その男の顔が鮮明に瞼の奥に現れ、愛夢は飛び起きた。
飛び起きたといっても眠っていたわけではない。

「もう少し、ねる」
と、きみにいってはいたけれど、瞼を閉じていただけだ。

記憶を失ったまま眠る事はできない。
瞼を閉じて『昨日の自分』を探していただけだ。

飛び起きて、心臓がパクパクしてきて、体がブルブルしてきて、壊れそうになった時、きみの声が聴こえた。「どうしたの？」

「おもい、だし、ちゃった」

「思い出した？」

「ゆ、め」

「夢？」

「怖い、夢を、観た、の」オウム返しをしてくるきみに、震えながらも愛夢はいった。「そんで、思い、出し、た」

自分でいっておいて、すぐにそれを否定する。
あれは夢ではない。
だいたい愛夢は眠っていたわけではない。

あれは記憶だ。

愛夢は飛び起きたままの姿勢であたりをみわたした。
きみはどこにもいない。

そらそうだ。

きみの声は愛夢の心の中で聴こえていただけだ。
病室には、愛夢ひとりいるだけだった。

「怖い夢を観た、って？」
と、きみは愛夢の心の中に顔を観(み)せた。

「夢じゃなかった」
と、愛夢は心の中で首を横ふった。

昨日のことは思い出せていないけど、遠い昔を思い出した。

「夢じゃなかった、って？」

と、心の中のきみは聞いてきた。

「うん。あれはアムの記憶だった」

と、心の中のきみに答えた。

伝説

〈第2話　伝説〉

昨日の事は思い出せていないけど、遠い昔を思い出した。

名前は、安室　覇那子。
（あむろ　はなこ）
ニックネームは『アム』。

顔は、
あなたの想像にまかせる。

主人公が、
『かわいほうだ』
と、ストレートに謳っている小説もあまりにも芸がない。

だけど、この小説のように、主人公が女性の場合。

もし読者が女性なら、主人公を自分におきかえる人達が多いよね。
だから主人公の顔はかわいほうがいい。

もし読者が男性の場合。
ぶさいくな女の話は聞きたくないよね。

だから主人公の顔はやっぱり素敵に表現するほうがいい。

ファッションやヘアースタイルも素敵に表現する。

スタイルも素敵なほうがいいにきまってる。

人それぞれ好みは違うけれど、それはそれで別にいい。

全体の８０％ぐらいを素敵に表現しておく。
残りの２０％ぐらいを読者の想像にまかせる。
そうすると、読者のイメージが素敵な主人公を誕生させる。
気分よく小説の中に入り込める。
それはわかっているんだけどね…。

それでもアムは自分の事を素敵だと表現できる性格ではない。

もし、季節に例えるなら、晩秋。
天気に例えるなら、曇り時々晴れ。
太陽か月なら、月。それも、三日月。

当然それは顔の例えじゃなく、全体的なアムのイメージって事、それは云うまでもないよね。

ー∞ー∞ー∞ー

アムの村には伝説がある。

アムの村だけではない。沖〇霊域とよばれる所を中心に、その周辺の村には同じ伝説がある。

色情魔なるものがいる。
色情魔に憑かれた男性は霊域に住みつく。
そして霊域に寄りつく女性を、かたっぱしに、襲う。

色情魔とはその男性のご先祖様。
色情魔はその男性の体がボロボロになるまで、それを続ける。
ボロボロになれば、（以前）襲った女性から生まれた手ごろな男性をみつけ、その男性に乗り変える。
それを千年以上も続けている…。

霊域には近寄らないよう、幼い頃から教育されていた。
当然のようにアム自身もそのつもりだった。

アムはほっぺをチュ～っと吸って、ひよこのくちばしをする。
こうする事によってアムの脳みそは回転する。

ひよこのくちばしを、
「かわいいよ」
と、いってくれた彼を想い、アムは涙がうかんだ。

アムはその顔で思案した。

霊域に行ってみよう。
行かずにはいられない。
アムの愛した彼が、アムを愛した彼が、行方不明の彼が、色情魔に憑かれた、、、
と、噂になっているのだから……。

クライマックス

第3話　クライマックス

普通、クライマックスに近づくと、この小説の場合、アムが追いかけられるシーンは、事細かく模写するほうがいい。
あまりそれに沢山ページを使っている作品もどうかと思うけれど、最低限のページは必要だ。
たぶん、そのほうが読者をあつくさせる。
それは、わかっているつもりなんだけどね…。

それでも、アムはどれだけ追いかけられたのか、どのように逃げたのか、全く記憶に、ない。
無我夢中だった。

もしアムが作家なら、そこのところは適当にごまかすかもしれない。
でも、アムは作家ではない。
まして『ごまかし』は大嫌い、だ。
おそらく少々の格闘はあったのだろう。
衣服がボロボロなのがそれを物語っている。

片側が絶壁。
もう片側が谷底。
そんな山道だった。
その先には洞窟がみえている。

…霊域。

アムが我に返った時には、自分自身の両手で自分自身の両腕をひっかくようなカッコウで倒れこんでいる、そんな変わり果てた彼の姿がそこにあった。

冬だというのに、生暖かい風が吹いた。

「ア…」彼の苦しげな声が耳に届いた。「…ム」

「…」アムの精神はそれに耐えられなかった。「…」

「ア、ム、イ、マ、キ、タ、ミ、チ、ヲ…」震えながらも、かうじて口が動いていた。「ヒ、キ、カ、エ、セ」

自分の両腕をひっかく仕草。
それは何かに葛藤している彼の『精一杯』なんだろう。

「…」それでもアムは声がでなかった。「…」

「ハ、ヤ、ク」彼の声は最後のほうは言葉になっていなかった。「ヌェ、グェ、ルォ…」

その容姿はもはや彼ではなかった。

…色情魔。

だけど、そこには彼の心がわずかに残っている。
と、アムは感じた。
アムは彼のなまえをよんだ。
彼は肯く姿勢をみせた。
もともと逃げるつもりはなかった。

それでも、彼の変わり果てた容貌を目にした時、獣のように襲いかかる彼から、無我夢中で逃げてしまった。

「ごめん、ネ。逃げてしまって」
と、アムは彼に近づき、彼にふれた。

「ハヤ、グ、ヌェ、グェ、ルォ」
と、彼はそれを振りはらう。

その仕草の直後、彼の形相は獣のように変化した。

「ニガスモノカ」
と、この台詞は色情報魔以外の何者でもない。

よだれをたらし、両手の爪をむきだし、牙をもむきだすかのように、グゥーとアムに襲いかかる。

でも、彼の心がそこに残っている。
と、アムは信じた。

アムはお得意の、ほっぺをチュ〜と吸って、の、あの、ひよこのくちばしで、思案した。

アムは逃げずに瞼を閉じた。

「ニ、ゲ、ルォ」
と、これは彼の心の叫びだ。

次に、色情魔と彼の心が交互に入り混じる。「ニガスモノカ」「…ゲ、ロ」「ニガスモノカ」……。

顔は骨と皮。目が落ちこみ、頬が落ちこみ、ミイラ寸前の彼に、アムは抱きついた。

アムは瞼をとじた。

そして幸せだった頃の彼を想いうかべた。
その瞬間、彼から力がぬけ、というか、何もかもがぬけ、彼はそこに崩れた。

アムは瞼をあけた。

そこにはミイラ寸前の彼が、さらに生気なくくたばっていた。

アムは彼のなまえをよんだ。
彼は肯くことはなかった。
アムの目に涙がうかんだ。涙で彼が滲む。
彼の顔にアムの涙がこぼれた。

「シキ、ジョウ、マ、ハ」彼の声が幽かに響いた。「ヌ、ケ、ダ、シ、タ」

アムは彼のなまえをを呟いた。
でも、彼の反応はなかった。

アムの愛が色情魔をおいだしたのか？
それとも、逃げない女に興味がなかったのか？
それとも、彼の肉体の限界だったのか？
アムにはわからないけれど、とにかく色情魔はぬけだした。
と、彼はいった。

たぶん、新しい体に移るのだろう。
と、アムは思った。

アムは彼のなまえをもう一度つぶやいた。
彼の唇がわずかに反応した。

アムは彼のなまえを優しくよんで、そして続けた。「大丈夫ぅ」

「イシ、キガ、トウ、ノ、イ、テ、イ、ル」
と、彼の口が動いた。

「喋らないで、いいよ」
と、アムは大粒の涙を二粒こぼした。

「モゥ、アムノ、コエガ、…アムノ…」

「喋らないで…」「…カ、オ、モ、ミ、ミ、」「喋ら…」

「ミ

エ

ナ…」

アムは彼のなまえを叫びながら、幼少の娘のように泣きくずれた…
…。

マイ　ヒストリー

第４話　マイ　ヒストリー

アムは彼のなまえを叫びながら、幼少の娘のように泣きくずれた……。

アムはピクリとも動かなくなった彼の胸で、どれだけそうしていただろうか？

まったく記憶になかった。

それでも、、、

涙が枯れ果てたアムは、魂を奪われたように、彼をただぼんやりと眺めていたことは、記憶の片隅に残っていた。

ー∞ー∞ー∞ー

一年前に母が病気で亡くなった。

その時でさえ、魂を奪われたような、そんな体験はしていない。

幼い時、既に父も亡くしている。

思えば、その父の死が彼との運命の出会いそのものだった。

父が亡くなっ時、父がまだ母と結婚する前の恋仲だった女（ひと）が葬儀にきた。

（その時は、ただのおばさんだと思っていたけれど、それを後にしった）

彼女は息子とふたり、自分の実家で両親と兄夫婦と一緒にくらしていた。
それがどんな事情でそうなったのか、アム達はその親子と、アムん家で一緒に生活することになった…。

母とおばさんは近くの農家で働いた。
今までより貧しくなったけれど、それはそれで毎日が楽しくなった。

おばさんはアムの母より三歳上。子供のほうもアムより三歳上。
アムはお兄ちゃんができて嬉しかった。
ニックネームの『アム』は、その時お兄ちゃんがつけてくれた。
『ハナちゃん』とよばれていた時より、素敵な少女に大変身をした気分だった。
すごく気にいって、自分の事も自分でそうよぶようになった。

お兄ちゃんが小学校を卒業するまでの数年間、一緒にくらした。
お兄ちゃんが小学校を卒業する時、お兄ちゃん達は別の島に引っ越した。
お兄ちゃんはその島の旅館の調理師になるのが夢で、中学校をその島に選んだ。

お兄ちゃんが中学校を卒業するまでの三年間は、母と一緒によく遊びにいったものだ…。

お兄ちゃんは夢が叶い、中学校を卒業し旅館の調理師見習いが内定した。

お兄ちゃんが就職をして、始めての夏のことだった。
それはアムが中学一年生の夏休みでもあった。
母とお兄ちゃん家に遊びに行った。
お兄ちゃんに彼女ができていた。
彼女は旅館のお嬢さん。
お兄ちゃんより三歳も上だった。
アムはショックを隠せなかった。
その時、アムはお兄ちゃんが好きなんだ、と初めて気づいた。
それからアムは、お兄ちゃん家に遊びに行くことはなかった。
母に誘われても、行くことはなかった。
母が行く時もアムは断ってばかりだった。
母がひとりで遊びに行った三度目の時、お兄ちゃんがアムに会いたいといっていた、と母から聞いた。

一瞬胸がキュンとしたけれど、それを隠し、
「じゃあ、この次」
なんて適当にごまかした。

それでも次の機会もアムは断っていた。
結局、中学生活の三年間は行くことはなかった。
でも、アムが中学校を卒業する時、アムのお祝いをする、そんなふうに話しが盛り上がった。
その時はさすがに行くことにした。

お兄ちゃんと二年半ぶりの再会だ。
お兄ちゃんは大人なっていて、凛々しくなっていた。
チョッピリ照れくさかった。

でも、そんな気持ちを隠し、

「彼女と仲良くしてる？」
と、嫌みっぽく聞いてやったら、
「とっくに別れた」
と、お兄ちゃんはさらり返した。

「どうして、別れたの？」
と、アムが、聞いたら、
「もっと好きな人がいたのに気づいたから」
と、お兄ちゃんは答えた。

そのお兄ちゃんのいう、もっと好きな人が、アム、だった。
お兄ちゃんも旅館のお嬢さんと交際をして、アムのことが好きだったんだ、と初めて気づいたらしい。
それを聞いたアムはほっぺが赤く染まったのが自分でわかった。
旅館のお嬢さんはサッパリとしたタイプで、なんのわだかまりたいもなく、ただの使用人とお嬢さんの関係になったらしい。
というか、彼女は最近結婚をしたのだ。

その後、アムとお兄ちゃんの遠距離交際が始まる。
三カ月に一回程度しか会えなっかたけれど、アムは幸せだった。
電話がどこにでもある時代ではなかったけれど、文通なんかもしたりして、けっこう青春していた。

アムは中学校を卒業して、お家（うち）の近くの旅館で働いていた。
アムの彼氏になったお兄ちゃんと、将来一緒に働けるように、旅館の仕事を選んだ。

それから二年程して、母が病気で倒れた。
母は仕事を辞め、アムひとりのお給料で生活する事になった。
だから、もう彼ん家に行くことはできそうにない。

その時アムは気づいた。
アムのほうから彼ん家に行くばかりで彼のほうから来たことはない。
それどころか、彼は小学校を卒業して、アムん家を出てから、この村に一度も帰ってきていない。
そんな事を思っているやさき、母の病状が悪くなり、アムん家の村から離れた大きな病院に入院することになった。
その時は、アムの旅館の電話をかり、彼の旅館に電話した。
彼とおばさんはすぐに来てくれた。
その時に、彼にどうしてアムん家に一度も来てくれなかったのか、問いただした。

＝＝＝彼の父親は色情魔に憑かれた男だと聞かされた。
すなわち、おばさんは色情魔に憑かれた男に犯されたのだ。
そして、葛藤の末に彼を生んだのだろう。＝＝＝

だから彼は霊域近くのアムん家に来る事ができなかった。
色情魔に憑かれる可能性があるからだ。
アムはその事実をしった。
でも、そんなにショックじぁなかった。
母が治れば、一緒に彼の島に行けばいいだけだ。
アムは彼を愛していた。

母の看病の為、仕事を長期で休む事にした。
一カ月でお金がなくなった。
でも、おばさんが病院にお見舞いに来てくれて、お金を置いてくれた。
その一カ月後は彼が来てくれた。
その時、アムをお嫁さんに欲しい、と彼は母にいった。
母はもう喋る事が苦しそうだったけれど、とても嬉しそうだった。
もちろん、アムも嬉しくて、涙がこぼれた。

その一カ月後は再びおばさんが来てくれた。
母はその日を待っていたかのように、息をひきとった。
母はアムを残して、逝ってしまった…。

アムがあまりに落ち込んだので、おばさんはずっと傍らにいてくれた。
彼には連絡しなかった。
でも、彼は何かを予感したようで、三日目にアムん家にやってきた。
彼は母の位牌の前で、アムを幸せにする、と約束してくれた。
そして、すぐにトンボ帰りをした。

初七日が終わり、おばさんは帰った。

数日して、おばさんが血相を変えてアムん家に来た。
彼が行方不明だと聞かされた。
アムは胸騒ぎがした。
それでも暗黙の了解のように、色情魔の話題に触れなかった。

その後、アムは仕事を復帰し、おばさんは昔お世話になった農家で働くことになり、アムん家でふたりの生活が始まった…。

あれから一年…。

冬だというのに、生暖かい風が吹いているこの日、アムは霊域に行くことを心に決めたのだった……。

ー∞ー∞ー∞ー

涙が枯れ果てたアムは、魂を奪われたように、彼をただぼんやりと眺めていたのは、記憶の片隅に残っていた。

「覇那子ちゃーーーん」
「覇那子ちゃーーーん」
と、山彦達がこだましている。
遠くから山彦達が響いてくる。
そんな山彦達がアムの意識を現実に引き戻した。

前編／最終話

前編／過去の観覧
〈最終話　愛と希望〉

「覇那子ちゃーーーん」
「覇那子ちゃーーーん」
と、山彦達がこだましている。
遠くから山彦達が響いてくる。
そんな山彦達がアムの意識を現実に引き戻した。

『覇那子（はなこ）』
…それがアムの本名だ。
アムはここ（霊域）に来る前に、遺書ってわけではないけれど、おばさんに感謝の気持ちを書き残していた。
それをみつけたおばさんが、村長さんかおまわりさんに伝えたのだろう。
皆（みんな）が救助に来てくれたようだ。

「ハナちゃぁーん」この声は？「どこにいるのぉー」

おばさんも来てくれている！？
心臓が火山の噴火位のエネルギーで破裂しそうになった。
ここ（霊域）はおばさんにとっては世界で一番イヤな場所のはずだ。
訂正。宇宙のどこよりもイヤなはずだ。
霊域に来るのと、銀河の果てにひとり放り出されるのと、二者選択。
それはおばさんにとっては究極の選択ではない。

おばさんは迷わず銀河の果てを選ぶだろう。
そんなおばさんが来てくれた。
こんなアムのために…。
アムは胸が痛くなった…。

山彦達がだんだんと近づいてくる。
皆がち近づいているのだ。
そのうちに発見されるだろう。

アムは瞼をとじた。

そして、ほっぺをチュ～っと吸った。
この、必殺ひよこくちばし、この技の披露もこれで最後になるかもしれない。
アムはその顔で熟考した。

＝＝＝彼をひとりであっちの世界に逝かせない。
遠距離恋愛にも限度がある。
一緒に逝こう。＝＝＝

アムは瞼をあけた。

それが必殺技で出した答えだった。
彼と一緒にあの崖から、谷底に飛び込むだけでいい。
それだけのことだ。
と、アムは思った。

「一緒に逝くから、ネ」
と、アムはつぶやいた。

不思議と涙は流れなかった。
既に、一生分の涙を流してしまったのかもしれない。
アムは俄かに笑った。
人は悲しすぎる時には、笑ってしまう生き物かもしれない。
こんどは大声を張り上げて笑った。
けして気が狂ったのではない。
アムは、たぶん、正常だ。
アムは彼を抱きかかえた。
彼の体は氷のように冷たかった。
軽かった。
彼がいなくなってから、一年程経っている。
その間、何も食べていなかったのかもしれない。
アムはそんな彼に口づけをした。

「愛している。アムはずっと一緒だよ」そして、祈るように続けた。
「来世は幸せになろう、ネ」

おばさんの声がさっきよりかなり近くに感じた。
アムは辺りをみわたした。
救助に来てくれた皆がアムの視界に入った。
おばさんの姿も朧気に映った。
そのうちに向こうからも気づくだろう。
アムは彼を抱きかかえたまま、崖のほうに歩み寄った。
崖まで十歩位の所で立ち止まり、大きく深呼吸をした。
「お父さん。お母さん」アムは天を見上げた。「彼とそっちに逝ってもいいよね」
アムは色々な想いをかみしめながら、一歩一歩崖のほうに近づいた。

もう、後戻りなんてしてられない。

「ハナちゃぁーん。ハナちゃぁーん」おばさんの声がアムの脚を止めた。「じっとしているのよー。今、行くからねぇー」

その声が近くに感じたので、アムは振り返った。
皆がこっちに向かって走ってくる。
アムに気づいたようだ。
それでも、アムは考える余裕がなかった。
アムは崖のほうに振り向いた。
皆の大声が背中で感じるけれど、アムには言葉として届いていない。
後悔はない。
崖はもう目の前だ。
アムは崖を前にして、もう一度振り返った。
皆がもうそこまで来ていた。
おばさんは三番目位の位置だった。

「おばさん」アムの瞼の奥にまだ涙が残っていた。それが滝のように流れた。「ごめんなさい」

アムは彼と一緒に谷底に飛び込んだ。

一瞬のことだった。

アムは何か大きな力に包まれていた。
意識が朦朧としていて、それが何なんだかわからない。
そんな意識が幼い頃にスリップした。

…アムは悲しくてたまらない。
父は優しく抱いてくれた。

悲しみはどこかに飛んでいき、夢の世界に導かれる…。
あの日頃と同じだった。
悲しみはどこかに飛んでいった。
夢の世界に導かれている…。

アムはそんな半覚醒の状態で、
「お父さん、助けてくれたの？」
と、つぶやいた。

眼球の動きだけで、辺りを確認した。
崖の途中から生え茂っている大木達に包まれていた。

…助かったようだ。

でも、アムの胸の中には、彼は、い、な、い。
しっかり抱きかかえていたつもりだったけれど、離してしまった。
でも、アムはどうすることもできない。
このまま彼を追って、谷底に落ちることもできない。
体が自由にうごかない。

ヒュルルルー
と、生暖かい風が吹いた。

「…アム、シッカリスルンダ。…シンデハダメダ」谷底に吸い込まれたはずの彼の声がした。「…キボウヲステルナ」

これが幻聴というものだろか？
それでも、彼の意思がアムに伝わった。

彼は天国で（アムの）父と母と仲良くするだろう。
アムはお世話になった（彼の母に）おばさんに恩返しをしなければならない。
お父さんやお母さんやおばさんや彼の愛を忘れてはならない。
アムは死ぬことは許されない。
アムは希望を捨ててはならない。
彼の幻聴がそう教えてくれた。
…誰か、
…助けて。
…心からそう願ったけれど、もう遅いかもしれない。
…アムの意識はゼロに等しい。
…このまま死んでしまうかもしれない。
崖の上からおばさんの叫び声が朧気に聴こえた。
その叫び声が、催眠術の暗示のように聴こえた…。
アムを夢の世界に導びいている……。
そして、アムは、

意識を、、、

失っ

た。

前編／過去の観覧

Ｔｈｅ　Ｅｎｄ

エピソード

きみと出会って一年になるよね。
あれからいつもきみにはたすけられたよね。

テストの結果が悪かった時。
友達とケンカをした時。
失恋をした時。
ブルーな時。
病気の時。
…エトセトラ。

きみのおかげで、わたしはいつも元気でいられた。
そのお礼といっては何なんだけど、きみの記憶を小説にした。
タイトルはそのまんま『きみの記憶』。
書き始めたのはひと月前。

「普通、こんな場合、唄を作るんじゃないの？」
と、きみはいっていたけれど、作詞作曲には自信がなかった。

ー∞ー∞ー∞ー

「『きみの記憶』が仕上がれば『携帯小説』に投稿しようと思ってるんだけど。…いい？」
と、きみにいった。

「もちろん」
と、きみは答えた。

「ほんとにいいの？」

「そりゃ、ナナの作品なんだもの。ナナの自由にしていいよ」

（きみはわたしのことを『ナナ』と呼び捨てにする）

「でも、きみの記憶を、きみの視点で描いた作品だから…」

と、わたしは念をおした。

「そんなの関係ないよ」

と、きみは光速でかえした。

「よかった」

わたしは久々にワクワク気分を味わった。

そんな『ワクワク気分』に、きみは何かいいた気だった。

（少しの間（ま）の後）

「ちょっといい？」

と、きみは疑問系で語尾を上げた。

「なあに？」

と、わたしは首をかしげた。

「ほっぺをチュ～って吸っての、あの、ひよこのくちばしなんだけど」

「かわいいでしょ。それがどうかしたの？」

「アム、そんなことしてないんだけど」

（きみは自分で自分をアムとよぶ）

「あぁ、そのこと。きみと、わたしの、差をつけたかったのよ」
と、わたしは答えた。

「差を？」
と、きみには理解できないようだ。

「わたしは考える時、ほっぺをプ～っとフグのように膨らます癖があるでしょ。だからきみはその反対」わたしは解説をした。「きみが『ごまかし』大嫌いなのよく知っているけど、小説にはかかせないのよ」

「ふーん。そんなもんなんだ」
と、きみはとりあえず納得模様。

「そんなものなの。小説って奥が深いのよ」
と、わたしはいってやった。

「差をつけるためにごまかすことが、奥が深いって訳？それも単純に正反対なんて…」
と、きみもそれには負けていない。

「う・る・さ・い」
と、わたしはわざとしかめっ面。

「それに、どうしてアムが意識を失ったところで終わりなの？」

と、きみはちょっぴり真面目な質問。

「一人称の小説だから、きみが意識を失っているところを描けないし…。それに…」

「それに？」

「きみは救助された後、鬱に襲われたでしょ」

「…」

「やっぱ、一人称の小説なので、鬱に襲われたきみの語りも不自然だし」

わたしは正直に答えた。「…っていうか、そんなアムを描きたくなかったし」

（わたしもたまにはきみのことを『アム』とよびすてにする）

「…そっか。でもなんか尻切れトンボみたい」きみはそこを突いてきた。「後味わるくない？」

「…まだ後編が残ってるの。（後編）ぼんやりとうかんでるんだけど、角度の違う視点から描くので、どの道あそこは尻切れトンボ。わたしエンディング苦手だから、今、四苦八苦してるところ」

「大丈夫だよ。ナナは深く考えるんで難しくなるの。もっと軽い気持ちで。さぁ、肩の力を抜いて」

「うん。わかった。でも、わたしの小説は自称、超小説。小説を超えた小説。それゆえ、深く考えてしまうの」

「うん。わかった。頑張って」

「ありがと」

わたしはきみに励まされ、元気がでてきた。
そんな『元気』にきみはまだ何かをいいた気だった。

（少しの間（ま）の後）

「それに、思うんだけど。…タイトルの『きみの記憶』ってのがイマイチ」
と、きみはいちゃもんをつけた。

「そうかな。じゃあどんなのが、いい？」
と、それでもわたしは意見を聞いた。

「んーと。〇縄霊域」

「絶対、ヤだ」

「じゃあ、色情魔」

「もっと、ヤーだ」

「冗談。冗談」
と、きみはキャハハと笑った。

「もっと真面目に考えてよ。どうして、売れないホラー小説のようなタイトルになるのよ」

と、わたしは口を尖らせた。

「ホラー小説って何？」

「怖いって意味の…。怪奇小説かな。たぶん…」

「嘘の小説かと思った」

「それなら、ホラー小説じゃなく、ホラ小説」

「ふん。ふん。じゃあ、こんなのは、どう」と、きみ。「ナナの大冒険」

「わたし、冒険してないし」

「小説を描くことが冒険」

「なるほど。それも一理あるか」と、わたし。「でも、ダメ」

「じゃあ、アムの大冒険」

「あの、ねぇ…」

へへへ、と笑って、きみのジョークはまだ続く。「その時ぼくはきみの過去を知った」

「なんなのよ、それ。どうして『ぼく』なの？これでもわたし女の子なんだけど…」

「その時ナナはアムの過去を知った」

「どっちにしろ、ボツ」

「その時フグ顔のモテないナナはアムの美貌に嫉妬した」

ニヤっと笑って、わたしはさり気にドスを効かす。「お・こ・る・よ」

「アムの過去を知ったナナは小説を描く。そして読者は未来にはばたく蝶になる」

「長すぎー。それにどこから蝶がでてくんのよ」わたしは声を張り上げた。「だいたい、小説を描く、なんてタイトルありえない！」

「ありえない小説」

「もういい。きみの記憶、でいい！」

「ありえない小説家」

「誰かありえないのよ」

「ナナが」

「ふざけてる？」

「ちょっとだけ」きみはちょぴり声を下げた。「…でも、…マジに、ありえない小説、ってタイトルいいことない？」

「ない。ない。ない」

「じゃあ、ありえる小説家は？」

「ありえるなんて、よけいにありえない！？」

「じぁあ、普通に、小説家、ってのは？」

「小説家のどこが普通なのですか？」
と、わたしはわざと敬語でいった。

「小説家は普通じぁないのですか？小説家が耳にすれば、気を悪くされるのでは…」
と、きみも敬語でかえした。

「もぅ。むかつく。小説家ってタイトルが普通じぁないのよ」

「ナナは、普通のタイトルにしたいの？」

「そういう訳じぁ…」

「じぁあ、小説家、に決定！」

「誰がそんなタイトルに惹かれるのよ。わたしなら、そんなタイトルの本、絶対買わない」

「憧れの小説家」「夢みる小説家」「目指せ小説家」「1、2の3で小説家」「5、6、ナナちゃん小説家」
と、きみのジョークは止まらない。

「買わないものは買わない！」

と、わたしはムキになる。

「じぁあ、とっておきので」心の中のきみは、まだそれをひっぱる。
「〇説家になろうよ」

「ンっ、もうー」心の中のきみにツっこむ。「意味わからん」

最近、アムと喋ると最後はいつもこうだ。
いわゆる普通の女子高生の会話。
アムも『この時代』の娘に染まってしまった。

きみは「んー」と考えるている。

もちろん、それはタイトルではなく、笑い、をだ。
きみに相談したのが間違いだった。

「もう、アムには決めさせない」わたしはふくれっ面になる。その途端、何かが湧きあがった。「…愛夢に決めた」

ー∞ー∞ー∞ー

わたしは何かを考える時、ほっぺをプ〜っとフグのように膨らます癖がある。
小説もその顔で描いている。
そうすると、頭の回転がよくなる。

アムのジョークにふくれっ面になった時、頭が回転した。
考える時に、ほっぺを膨らます癖が逆に反応したのだ。
ほっぺを膨らましたので、ひらめきが湧き上がったのだった。

わたしは『きみの記憶』を書き始めた時の初心にかえった。
小説の書き出しの都合上、『あむ』というところをどうしても漢字に変換し、演出したかった。
『安室』で『あむ』は小説の性質上だめだ。

『愛夢。愛舞。亜夢。亜舞。編む』の四通りのかわいい文字プラスワンが頭ん中にうかんだ。

わたしはその時、これだ。
『愛夢』だ。と決めた。

それは真っ先にうかんだ文字だった。

小説のテーマは『愛』と『希望』。
…『愛』。
それに、希望。
即ち、『夢』…。

もっと早くに気づくべきだった。
いわゆる灯台下暗し。

タイトルは『愛夢』だ。
『愛夢』の他にはない。

ー∞ー∞ー∞ー

わたしは小説の書き出しには自信がある。
だけど、いつも途中までで後編を残している作品が多い。

『きみの記憶』改め『愛夢』も書き出しはスムーズにすすんだ。

でも、今までの作品同様、『愛夢』も後編でつまづいた。

でも、アムに励まされ、やっとこさで仕上げることができそうだ。

自分でいうんは何なんだけど傑作になりそうだ。

だから沢山の人に読んでもらいたい。

携帯小説に投稿しようと思ったのも、正直それなのかもしれない。

わたしは、それがアムへの『供養』になると自分にいいきかせた。

それでも内心、アムが猛反対するのでは、と思っていた。

でも、それは一人苦労だったよね。

残すは、後編だ。

わたしは、アムからのアドバイスを素直に受け入れ、軽い気持ちで、肩の力を抜いた。

そして、、、

ほっぺをプ～っとフグのように膨らまし、後編を描き始めた。

後編／未来の観覧

残すは、後編だ。

わたしは、アムからのアドバイスを素直に受け入れ、軽い気持ちで肩の力を抜いた。

そして、、、

ほっぺをプ～っとフグのように膨らまし、後編を描き始めた。

ー∞ー∞ー∞ー

後編／未来の観覧

わたしの名前は、飛鳥　那々子。（あすか　ななこ）
小説家志望の高校二年生の女の子。
そんなわたしがアムと出会ったのは一年前。
それは高校一年生の夏休みだった。

わたしは高校で新しいお友達ができた。
彼女は中学三年生まで〇縄に住んでいた。
そんな彼女と、わたしはすごく仲良しになった。

その日、わたしは彼女のお家（おうち）に泊まりに行った。

夜遅くまで、ジュースやお菓子でパーティーのような雰囲気でワイワイガヤガヤとヤっていた。

そして、何か怖いお話をしよう、みたいなそんなノリになった。
彼女の姉から（年齢順って訳ではなかったけれど）話し始めた。
彼女達が住んでいた村の伝説、〇縄霊域の色情魔の伝説を…。

わたしは体中が震えてきて、耳をふさいだ。
どうしてこんなにも怖いのか、自分自身わからなかった。
でも、わたしがあまりにも怯えたので、時間も時間だったし、眠ることになった。

お布団の中にうずくまった。
なかなか眠れそうにない。
頭ん中に、〇縄霊域や色情魔がグルグルと舞う。
瞼の奥にわたしのそんなイメージが動画のように蠢いた。

そんな中、わたしの意識が、一瞬、と、ん、だ。
体から魂が抜け出し、どこかに飛ばされたような、そんな気分を味わった。

いや、そうじゃない。

魂だけがそこに残され、わたしの体、それに、お布団、お部屋、周りの空間全てが、わたしの魂だけを残してどこかに飛んでいった。
わたしはそんな気分を味わった。

そして、異空間がわたしの魂に同調した。

それは一瞬のことだった。

辺り３６０度がわたしの視界にはいった。

気づいた時には、わたしは〇縄霊域を浮遊していた。
幼い頃から何度か味わったことのあるこの感覚…。
同じ体験をした人ならわかるだろう…。
わたしは、未来を観覧していた…。

⊂未来⊃

場所は〇縄霊域。
それは直感的にわかった。
いや、直感的というのは大げさかもしれない。
片側が絶壁。
もう片側が谷底。
そんな山道だった。
その先には洞窟がみえている。
それは、お友達のお姉ちゃんから聞いた、そのまんまだった。
わたしは浮遊しながら辺りを観わたした。
黒い帽子に黒いマフラー。それに黒いコートで身を隠すような格好の女性が、谷底に落ちそうになっていた。
その傍らで、９７９３と数字が刺繍されたニット帽をおでこがほと

んど隠れるぐらいに深くかぶり、大きなレンズのサングラスに豹柄のマスクをした女性が心配そうに見ていた。

その格好では容姿がハッキリしない。

でも、その豹柄マスクが数年先の自分自身なんだ、とこれまた大げさだけど直感した。

何を隠そう、ニット帽に刺繍された９７９３の数字は、わたしの数字版ペンネーム。

いわゆる『丘　七草ナンバー』なのだ。

数年先だと感じたのは、傍らにいた兄が、今より少しだけ凛々しくなっていたからだ。

時期は服装から予想して冬。

この予想も間違いはないだろう。

何度か『未来の観覧』を経験しているので、そのへんのところには自信がある。

崖から落ちそうになっている黒い女性を（未来の）わたしと兄とで助けにかかる。

ドジな（未来の）わたしは、代わり（？）に谷底に落ちてしまった。

一瞬ヒヤーっとしたけれど、幸い大木達にひっかかる。

どうやら助かっようだ。

わたしは浮遊しながらそんな滑稽な光景を観た。

そして、未来を観覧しているわたしは鳥肌が立つ想いを味わった。
今まで眠っていた記憶が走馬灯のように走った。
わたしは以前もここ〇縄霊域の谷底に落ちて大木達に救われた。
いや、そうじゃない。
それは『わたしの前世』の体験だ。
わたしは未来を観覧しながら、それを悟った。
未来のわたしはレスキュー隊に救助され、病院に運ばれた。
命に別状がないとわかり、兄は病院をはなれた。
わたしは浮遊しながら、自分自身を見守る格好なる。
未来のわたしは病室でスヤスヤと眠っている。
未来のわたしは寝言に知らない人の名前を呟いた。
知らない人の名前ではない。
それは『わたしの前世』彼女が愛した彼のなまえだった。
未来のわたしの中には『わたしの前世』アムがいる。
わたしは浮遊しながらそれを感じた。
わたしは未来のわたしに、
「おはよう。あむ」
と、ワザと陽気にそのニックネームを強調し、からかった。
未来のわたしの反応はない。
だいたい、わたしの声が届いているのかどうかもわからない。

それでも、
「アム、気分はどう？」
と、わたしの遊び心は終わらない。

未来のわたしは何かを考えているのだろうか？

いや、ボーっとしているだけだろう。

わたしは考え事をする時には、ほっぺをプ～っとフグのように膨らませる癖がある。
わたしのその癖は未来になれば治るのだろうか？
さすがに、ほっぺをチュ～っと吸い込んだ、そんなひよこくちばしなんてしていなかったけれど、フグ顔ではなかった。
無表情って訳ではなかったけれど、全くをもって普通の顔だった。

だから、
「どうしたの、あむ。ボーっとして」
と、わたしはいわずにいられなかった。

ややあって、
「もうすこし、ねる」
と、未来のわたしは突然声をだした。

わたしはその声にドキっとした。

一瞬、辺りが暗くなった。

わたしの魂を残し、異空間がどこかに飛んでった。

どうやら『未来の観覧』が終了したようだ。
そして、わたしは知らず知らずに眠りについた。

夢の中でアムと出会った。

ふたりはお話をした。
けっこうジョークなんかも炸裂して、ふたりは笑った。
でも、アムの辛い過去を聞かされた時には、ふたりは泣いた。
前世の記憶が蘇ったことにより、わたしはこんな夢を観たのだろう…。

わたしはその時（夢の中で）アムと約束をした。「わたし、絶対に幸せになるから、ネ。…それに、きみの彼の生まれ変わりを探してみるから」

後編／未来の観覧

The End

ー∞ー∞ー∞ー

『翌日、わたしの心の中にアムが顔を観せた。その時の驚きと喜びを、わたしは言葉にすることはできなかった。』
と、最終行を一旦そう打ったけれど、すぐにそれを削除した。
言葉にできないのだから、文章にもしなかった。
そんな理由（わけ）で、そこのところは読者の想像に任せることにして、わたしは後編を難なく描き終えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6626y/

愛夢＝アム＝

2012年1月12日22時54分発行